

第1回  
北大山岳館講演会



南極観測を支えたスピリット

# 探検から研究へ

北大山岳館でそのルーツに出会う

参加無料  
申込不要

2010年5月15日(土)  
13:30~16:30

## ● 講演

- \*南極観測の50年と北大山岳部  
渡辺興亜 (国立極地研究所・元所長)
- \*南極から見る地球環境の今 -南極氷床変動史を語る-  
澤柿教伸 (北大地球環境・34次47次越冬隊員)
- \*最新南極事情 -南極で1年を過ごして-  
樋口和生 (50次越冬隊員)

## ● 会場：北大山岳館

札幌市北区北18条西13丁目  
(北大恵迪寮東側)

## ● 定員 約80名

座席に限りがありますので  
一部立ち見となります



## 北大山岳館

北大山岳館は、北大山岳部出身者の会である「北大山の会」が山岳部創立70周年を記念して1995年に建設し、北海道大学に寄贈したものです。以来、北大の課外活動施設の一つとして、登山・探検・地球環境保全・途上国援助などに関心の深い学生諸君に会合の場として、また大学内外の先達・先輩との交流の場として、利用されてきました。

日々の運営を委託されている「北大山岳部／山の会」は、北大山岳部が創立以来収集・保有してきた貴重な内外の山岳・探検に関する図書・地図等を整理・保管し、新たな資料も加えて有効な活用を図ることも目指しつつ、当施設の有効活用の促進をはかっています。

このたび、当施設の内容を広く知って戴くと共に、山岳館が推進する教育文化事業の一環として、山や探検に興味を持つ一般市民や学生を対象に、講演会を開催していくことと致しました。その第一回目として、日本の南極観測事業を支えてきた北大スピリットのルーツに迫る講演会を開催いたします。

問い合わせ先：北大山岳館運営委員会 TEL：011-747-2111 内線5138 (山岳館, 水・土のみ 10:00~16:00)  
url: <http://aach.ees.hokudai.ac.jp/sangakukan/>, E-mail: [sangakukan@aach.ees.hokudai.ac.jp](mailto:sangakukan@aach.ees.hokudai.ac.jp)

主催：北大山岳館

共催：(社)日本雪氷学会北海道支部, 北海道大学IFES-GCOE環境教育研究交流推進室, 南極OB会北海道支部, NPO法人雪氷ネットワーク

後援：北海道大学総合博物館, 日本山岳会北海道支部



# 探検から研究へ

北大山岳館でそのルーツに出会う

## 《 要 旨 》

### 南極観測の50年と北大山岳部

国立極地研究所 元所長 渡邊興亜



1956年11月に第一次南極観測隊を乗せた「宗谷」が日本を出発し、東南極大陸オングル島に昭和基地を建設して11名の越冬隊が観測を開始してから半世紀が経過しました。

- 「宗谷」の時代—探検観測の時代：南極観測が開始された当初はさまざまな設想的制約があり、研究観測の多くは予察段階に留まっていたましたが、それでも地理的探査が精力的に実施され、第4次隊は大和山脈探査に成功し、第5次越冬隊は南緯75度にまで達しました。
- 「ふじ」の時代—探検から本格観測の時代へ：1965年に「宗谷」の倍の大きさの砕氷船「ふじ」が就航して輸送量は500トンに増強され、南極観測は新しい展開を迎えました。基地観測の充実とともに観測域拡大が計画され、第9次隊は昭和基地—南極点往復旅行を成し遂げました。1970年代から本格的な内陸調査が開始され、日本最初の内陸基地「みずほ基地」も建設されました。
- 「しらせ」の時代—本格観測の展開：1983年に「宗谷」の約4倍「ふじ」の約2倍の「しらせ」が就航し、輸送量は1000トンとなって南極観測は本格的なものとなりました。1994年には標高3800mの東南極大陸の頂上域の一つに「ドームふじ」基地が建設され、2500m深までの深層雪氷層掘削計画成功へと発展しました。2006年には3000m深まで掘削して70万年間の雪氷コアの採取に成功しています。こうした南極観測の流れの中に、多くの北大山岳部出身者の活躍がありました。その歴史を振り返ります。

プロフィール

- 1939年生まれ。北大理学部地質学鉱物学科卒・同大学院修了。名古屋大学助教授を経て1985年から国立極地研究所教授、2000-2004年 同研究所々長。雪氷学が専門。北極・ヒマラヤを含め世界中の氷河・氷床を研究してきた行動派。北大山の会会員。
- 第11次(1969-71) 第15次(1973-1975) 南極地域観測隊越冬隊員、第29次(1978-1981) 隊長兼越冬隊長、第35次(1993-1995) 隊長。

### 南極から見る地球環境の今 — 南極氷床変動史を語る —

北海道大学地球環境科学研究所 助教 澤柿教伸



草創期より南極観測を担う人材を多く輩出してきた北大山岳部に憧れて北大に入学し、登山に明け暮れる学生時代を過ごしました。34次観測隊で念願の南極の地を踏んで以来、氷の下の堆積物からダイナミックな氷河像を地質学的に解きあかす「氷河地質学」を専攻して、氷河学と地質学の境界領域で氷床の安定性に関する問題を追究しています。南極の他にも、ヒマラヤ・パタゴニア・カムチャツカ・日高山脈などで野外調査を実施しています。

南極の氷・地形・石・泥・化石が語る地球の過去と未来を読み解くには、南極の自然環境と直接向き合う野外調査が不可欠ですが、それを可能にしている極限環境での野外観測技術は、山岳部によって培われたものと言っても過言ではありません。南極の氷を掘ってわかること、南極の海底を掘ってわかること、南極の砂浜を掘ってわかること、... 極限のフィールドワークによって解き明かされる地球環境の変動について紹介します。

プロフィール

- 1966年 富山県生まれ。1990年 北大理学部地質学鉱物学科卒業、1997年 北大院環境科学研究科博士課程修了、国立極地研究所JSPS研究員、北大低温科学研究所COE研究員を経て、1999年から北大院地球環境科学研究科助手、2007年より現職。北大山の会会員。
- 第34次(1992-1994) 第47次(2005-2007) 南極地域観測隊越冬隊員。

### 最新南極事情 — 南極で1年を過ごして —

第50次南極観測越冬隊員 樋口和生



何もかもが手探りだった第一次隊から半世紀。

基地での生活、観測環境、観測を支える設営活動など、現在の南極観測はどのように行なわれているのでしょうか。

第50次南極地域観測隊越冬隊に装備・フィールドアシスタント担当隊員として参加し、1年間の越冬生活を終えて3月に帰国した演者の目から見た南極観測の最新事情を紹介します。

プロフィール

- 1962年 大阪府生まれ。1980年 北大山岳部入部、1987年 北大農学部畜産学科卒業。NPO法人北海道山岳活動サポート理事。(社)日本山岳ガイド協会認定山岳ガイド。北海道山岳ガイド協会副理事長。北大山の会会員。
- 第50次(2008-2010) 南極地域観測隊越冬隊員。南極では、装備・フィールドアシスタント担当隊員として、野外行動の際の危機管理及び越冬隊員の野外技術教育を担当。